

第56回

岡山県学校図書館研究大会

勝央大会

大会テーマ

豊かな心と主体的に学ぶ力を育てる学校図書館



令和7年8月19日（火）

勝央文化ホール

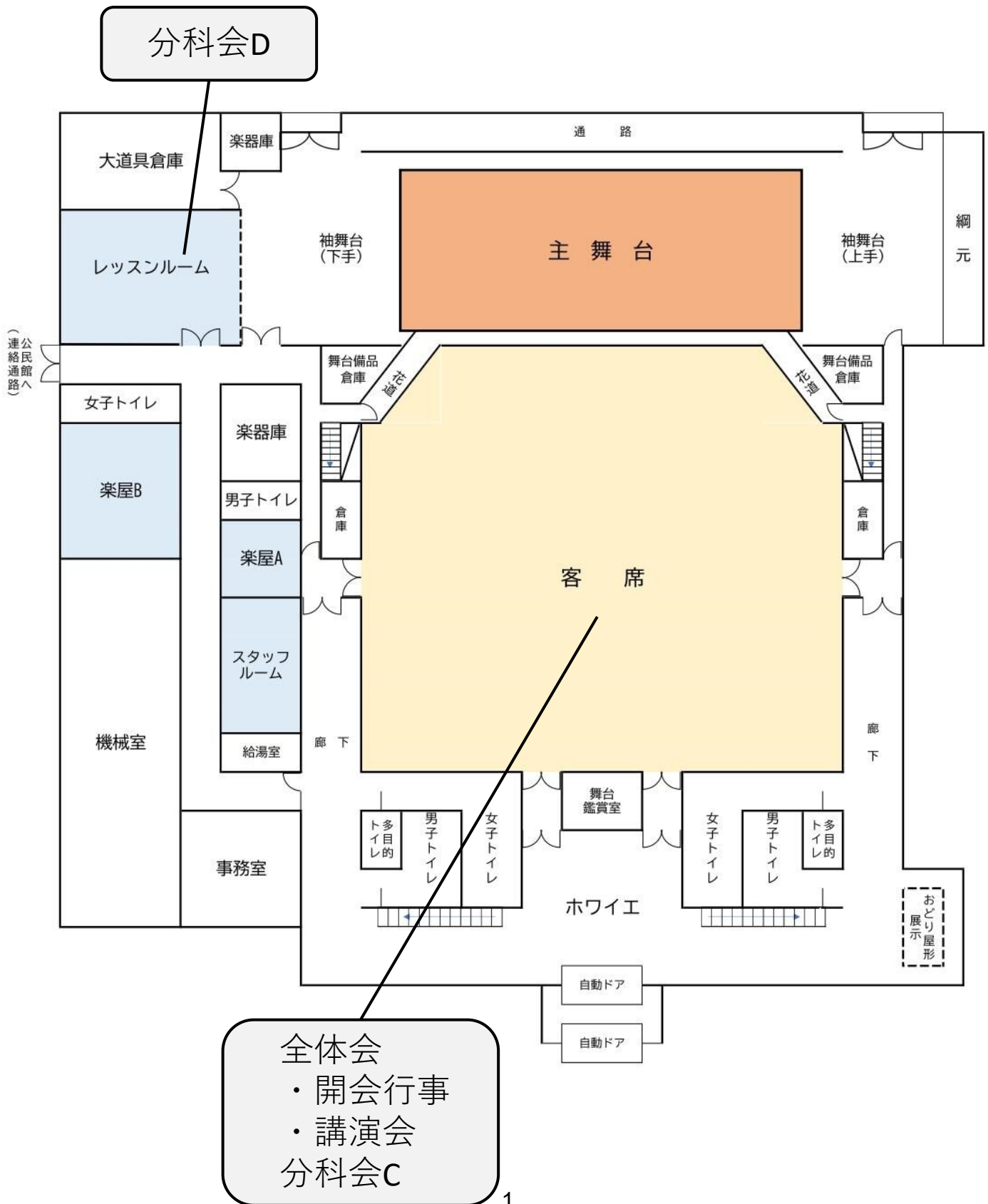
勝央町公民館

岡山県学校図書館協議会

目 次

会場案内	1
ごあいさつ	3
開催要項	4
講 演	5
分科会一覧	6
分科会発表要項	
【分科会 A】	7
【分科会 B】	13
【分科会 C】	19
【分科会 D】	25
大会役員一覧	29

勝央文化ホール



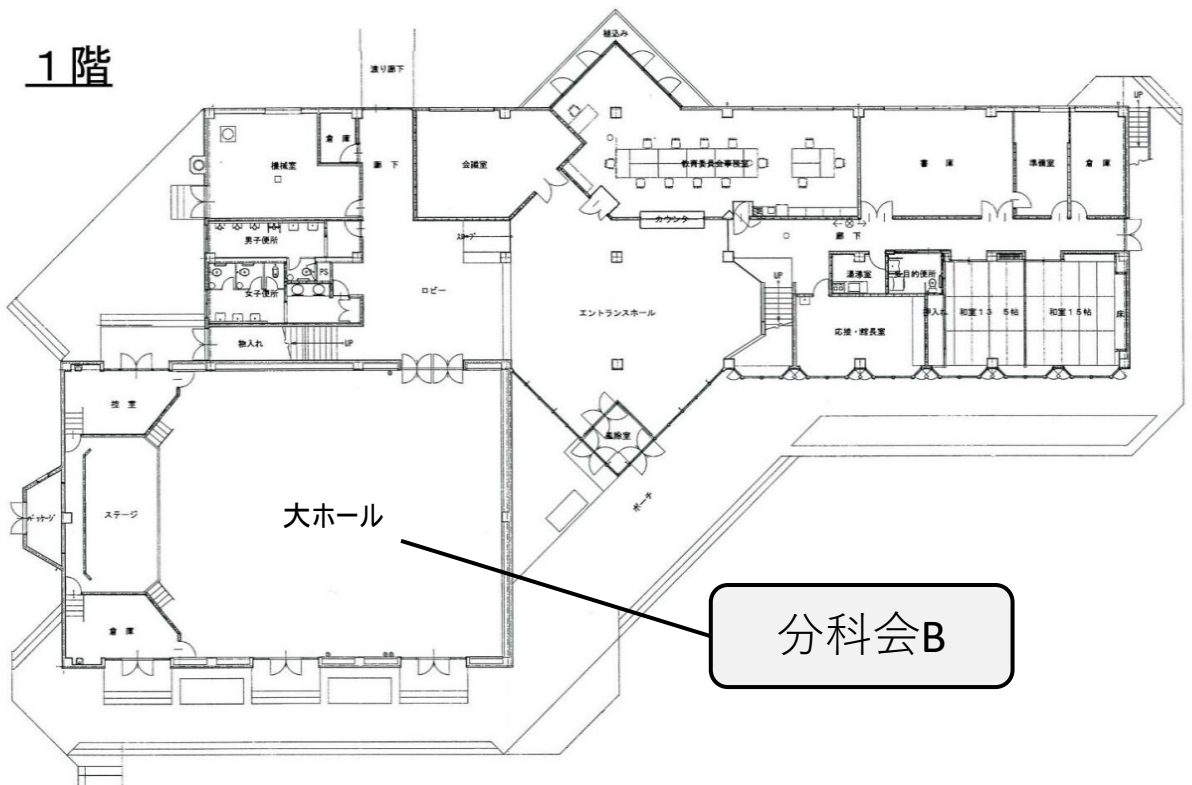
勝央町公民館平面図

2階



分科会A

1階



分科会B

ごあいさつ

岡山県学校図書館協議会

会 長 森 田 保 志

第 56 回岡山県学校図書館研究大会・勝央大会の開催にあたり、御参加いただいた皆様に心より感謝申し上げます。とりわけ本大会の準備から運営まで多大な御尽力をいただいた岡山県学校図書館協議会美作支部・実行委員会の皆様に厚くお礼申し上げます。

岡山県学校図書館協議会は、県内の小学校・中学校・高等学校の学校図書館相互の連絡とその充実・発展をはかり、本県教育の推進に寄与することを目的として、戦後間もない昭和 25 年に発足しています。平成 12 年以降は研究大会を隔年開催とし、新型コロナ禍においては誌面開催とするなど、その時々で工夫しながら先人たちの思いを第 56 回まで繋いできました。令和 7 年度の勝央大会にお集まりいた皆様が、知識や経験を共有し、互いに刺激を受けながら、より良い学校図書館づくりに向けて共に歩んでいけることを心から期待しています。

本大会では、「豊かな心と主体的に学ぶ力を育てる学校図書館」を大会テーマに掲げました。新型コロナ禍を経て 1 人 1 台端末が一般化し、I C T 環境は急速に向上しました。多様な情報に簡単にアクセスできるようになり、様々なアプリを通じて距離を超えたコミュニケーションも容易になりました。その一方で、過度な依存によるストレスや不安、フィルターバブルによる思考の硬直化なども懸念されています。また、昨今の生成 A I の著しい進歩は、生成物の良否を判断するため、かえって知識の概念習得や深い意味理解まで求めるといった状況を生じています。

このような状況にあって、学校図書館の果たす役割はますます重要になってきています。子どもたちが自ら必要な情報を見つけ出し、深い意味理解をもって活用し、新しい知識を生み出していく「主体的な学び」を支援すること、「情報リテラシー」を育成していくこと、何より本と出会い、様々な感情を受け入れ、他者を理解し、世界を広げていく「体験としての読書」を推進することなど学校図書館は「令和の日本型教育」に欠かせない存在となっています。

本大会では、まずノートルダム清心女子大学 人間生活学部児童学科 教授 湯澤 美紀先生から御講演いただきます。先生は、幼児教育や発達心理学の観点から絵本や読み聞かせが子どもたちの豊かな心に与える影響を多面的に研究されておられます。続く分科会では、「学校図書館」「豊かな心」「主体的に学ぶ力」「特別な教育的ニーズ」をキーワードに 4 つの分科会でそれぞれ実践発表をいただきます。本日御参加の皆様には御発表から多くの知見を持ち帰られますとともに、活発な意見交換と情報共有をお願いしたいと思います。そのことが、それぞれの学校での学校図書館の更なる充実と子どもたちの成長に繋がるものと確信しています。

最後になりましたが、本日お越しの御来賓、指導助言くださる先生方に感謝申し上げますとともに、本大会が皆様にとりまして、実り多いものとなりますことを祈念いたしまして、巻頭の御挨拶とさせていただきます。

開催要項

- 1 期 日 令和7年8月19日(火)
- 2 会 場 勝央文化ホール・勝央町公民館
- 3 主 催 岡山県学校図書館協議会
- 4 共 催 岡山県小学校教育研究会 岡山県中学校教育研究会 岡山県高等学校教育研究会
岡山県学校図書館協議会美作支部
- 5 後 援 岡山県教育委員会 勝央町教育委員会 岡山県市町村教育委員会連絡協議会
岡山県読書推進運動協議会 (公社)全国学校図書館協議会
- 6 大会テーマ「豊かな心と主体的に学ぶ力を育てる学校図書館」
- 7 趣 旨

今日、我が国の社会は、IT の飛躍的進化やグローバル化の進展等により、社会や経済の構造が日々大きく変化しています。そして、学校が解決しなければならない課題は山積し、予測困難な時代を生き抜く力の育成が教育の場に求められています。

大きな変化の時代を迎えていますが、子どもたちに有益な図書や学校図書館の存在が、児童・生徒の心を育むこと、主体的な学びを支えることに大きく貢献すること、すなわち、子どもたちが生きる力を身につけて未来を切り拓いていくうえで重要な役割を占めていることは、今までもこれからも変わりはありません。また、令和4年度から令和8年度を対象期間とする第6次「学校図書館図書整備等5か年計画」が策定され、主体的・対話的で深い学びの実践の場として、学校図書館が期待されています。

本大会では、こうした学校図書館がもつ役割や使命を再確認し、児童・生徒の豊かな感性や情操を育む学校図書館の在り方、自ら課題を見つけ、主体的に探究し、学びを深めていく「主体的・対話的で深い学び」を支える学校図書館の在り方等について、4つの分科会で発表される研究発表を通して研修を深め、学校図書館のさらなる充実をめざしていききたいと思います。

8 日 程

12:30 13:00 13:20 14:50 15:10 16:40

受 付	開会行事	講 演 会	移 動	分 科 会
-----	------	-------	-----	-------

9 講 演

演 題 『子どもが本を「聴く」「読む」「語る」ことの意味を問い直す』

講 師 ノートルダム清心女子大学 人間生活学部児童学科 教授 湯澤 美紀 氏

講演

演題 『子どもが本を「聴く」「読む」「語る」ことの意味を問い直す』

講師 ノートルダム清心女子大学 人間生活学部児童学科 教授 湯澤 美紀 先生

第56回岡山県学校図書館研究大会 勝央大会 分科会一覧

分科会	A	B	C	D
テーマ	「学校図書館の運営・連携」	「豊かな心を育み、読書の楽しさを味わわせる学校図書館」	「主体的に学ぶ力を育てる学校図書館」	「特別な教育的ニーズのある児童生徒を支える学校図書館」
小学校	【発表題】 つながり大切にした図書館教育 ～学校統合に向けた授業・環境づくり～ 【発表者】 吉備中央町立加賀南小学校 講師 山崎真理子	【発表題】 楽しい読書のために、図書と機会を提供する 【発表者】 津山市立高田小学校 教諭 谷本健太郎	【発表題】 学校図書館活用で、今までの学びを生かしたくなる授業づくり ～もっと!読みたい、伝えたい～ 【発表者】 岡山市立三軒小学校 教諭 高井 里紗 教諭 中山 晶葉 学校司書 三宅 真紀	【発表題】 子どもの実態に即した読書活動 ～授業実践および心の居場所になる学校図書館について～ 【発表者】 倉敷市立岡田小学校 教諭 久田 由貴 学校司書 山田 倫子 主幹教諭 岡本 博子
中学校	【発表題】 委員会活動、授業での地域の図書館・書店と連携した読書推進の取組 【発表者】 総社市立総社西中学校 教諭 太田 拓志	【発表題】 美勝英支部8中学校の現状と取組 ～豊かな心を育み、読書の楽しさを味わわせるための図書館との連携～ 【発表者】 美作市立美作中学校 教諭 畑 絢二朗	【発表題】 ICT時代の学習センターとしての学校図書館 【発表者】 瀬戸内市立長船中学校 教諭 直原 絵美	【発表題】 学校図書館を活用したインクルーシブ教育の実践 【発表者】 岡山市立操山中学校 教諭 酒見 紗世 学校司書 鶴身 知子
高等学校	【発表題】 岡山の高校図書館がつながる! でーれーBOOKSのこれまでとこれから 【発表者】 岡山県立水島工業高等学校 司書 中村 恵	【発表題】 心地よい居場所としての図書館作り ～図書委員会・国語科の取組～ 【発表者】 岡山県立東岡山工業高等学校 教諭 石山奈都子 司書 小橋 暁子	【発表題】 学ぶ力を引き出す学校図書館を目指して ～ことばの力を培う授業と図書委員会の取組～ 【発表者】 岡山県立笠岡高等学校 教諭 小原 千明	
助言者導	岡山県立総社南高等学校 校長 辻田 詔子	倉敷市立真備陵南高等学校 校長 細川 欣洋	岡山県立岡山大安寺 中等教育学校 校長 三村 美紀	岡山県教育庁高校教育課 指導主事 大塚 崇史
司会者	真庭市立北房小学校 教諭 安田 京幸	勝央町立勝間田小学校 教諭 横野 杜博	美咲町立美咲中央小学校 指導教諭 田原 理江	津山市立北陵中学校 教諭 神本 優月
記録者	真庭市立富原小学校 教諭 安東 菜津美	美作市立美作北小学校 教諭 安井 千尋	美咲町立柵原学園 講師 田村 明美	津山市立勝加茂小学校 教諭 石倉 明莉
責任者営	真庭市立久世中学校 教諭 森里 文明	美作市立大原中学校 教諭 矢内 亮	鏡野町立奥津小学校 教諭 日下 直子	津山市立鶴山小学校 教諭 安藤 優佳

つながりを大切にした図書館教育 ～学校統合に向けた授業・環境づくり～

吉備中央町立加賀南小学校 講師 山崎 真理子

1 はじめに

本校は、令和7年4月の学校統合により開校した児童数178名の小学校である。本校のある吉備中央町では、町内9校の小学校が3校ずつ統合し、加賀東・加賀西・加賀南小となった。昨年度まで、統合に向けていろいろな準備が行われる中、新3校の児童が、読書から遠ざかることなく、読書活動が円滑に進むことができるように、どのような取組ができるかを考え実践を進めてきた。ここでは、加賀南小学校に統合となった大和小学校での実践を紹介する。

2 具体的な取組

(1) 環境整備 ～本と本をつなぐ～

統合前の町内の小学校9校・中学校1校には、学校司書が4名配置されていた。1校に週1日の勤務が基本であった。統合後、スムーズに読書活動を継続していくことができるように、学校司書が中心となり、令和4年度から計画的に次のような準備を進めてきた。

① 統合3校の図書ラベルの書き方を統一

令和4年度から、新刊本の図書ラベルの色や書き方を統一し、児童が、統合後も図書の分類が分かりやすくなるようにした。

② 移管する図書の選書、廃棄

令和5年度の夏休み期間を使って、学校司書が各校を一緒に回り、統合先に移管する図書を決定していった。(移管先の学校ごとに決めた色のカラーシールを本の背に貼っていく作業)

令和6年度からは、学習用図書など新しく購入する図書は、統合校3校で相談して購入していった。統合先の小学校では、古い図書の廃棄や本棚の整理を進め、他2校から移管される図書を使いやすく配架できるようにしていった。

③ システム導入の準備

統合前には、町内のほとんどの小学校には、まだ図書館管理システムが導入されていなかったが、この統合を機に「図書館ナノ」システムの導入が決まり、その準備を進めていった。統合と同時にシステム化できるように、令和5年度から、各校で新システムに本を登録したり、バーコードシールを貼ったりするなど登録作業を行った。

④ 年間計画

各校の図書館教育担当者と学校司書が相談し、統合後の図書館利用の仕方について共通理解をした。令和6年度中に、令和7年度の図書館利用年間計画も作成した。



(2) 3校をつなぐ取組 ～児童と児童をつなぐ～

図書を媒介として、3校の児童がともに学ぶ機会を設けた。

① 3校合同授業

統合前には、3校の児童が集まって、合同の授業を行っていた。その中で、3年生の合同授業で国語科「図書館たんていだん」を行った。

3校の児童を7人ずつのグループに分け、「友だちに、お気に入りの本をしょうかいしよう」というめあてを立てて授業をした。グループの友達に本を紹介する際、各学校の国語で学んだ分類番号も合わせて発表した。その過程で、「同じ番号の本だ!」「同じ本なのに、分類番号が違う本があるよ!？」というつぶやきや感想が聞かれ、分類番号への理解



が深まった。また、同じ本やシリーズを選んでいる友達に親近感がわいたり、知らなかった本に興味をもったりする姿も見られた。

② リモート図書委員会

統合3校には、どの学校にも委員会活動として「図書委員会」があり、4～6年生の児童が参加していた。そこで、統合する3校の「図書委員会」をリモートでつないで開催し、互いの学校の図書委員の自己紹介や取り組みについて紹介し合った。読書週間が近い時期に行ったので、「他の学校の取組を、ぜひ自分の学校でもやってみたい。」「他の学校の図書委員もがんばっているな。」という振り返りの言葉が聞かれた。統合後の図書委員会の活動計画の参考となるとともに、同じような仕事をがんばっている仲間意識が感じられた。



(3) 統合後につながる読書活動 ～本と児童と地域をつなぐ～

① 読書貯金

春の子ども読書の日と秋の読書週間に図書委員会が中心となって、全校で読んだ本の1ページを1円として通帳に記録する「読書貯金」の取組を行った。約1か月の取組後、「個人の部ベスト10」と「学級の部ベスト3」を発表した。中間発表からさらに意欲が高まり、平均千円（1000ページ）を超える学級も多かった。秋の取組では、さらに多くの児童を巻き込むことができるように、本の種類やくじ引きでボーナスポイントを設け、楽しみながら読書貯金が進められるようにした。

学年	読んだ本のページ数	読書貯金	読書貯金
6/5	読んだ本のページ数	95	91
6/5	読んだ本のページ数	88	18
6/5	読んだ本のページ数	80	26
6/5	読んだ本のページ数	96	35
6/5	読んだ本のページ数	94	45
6/5	読んだ本のページ数	15	44

学年	読んだ本のページ数	読書貯金	読書貯金
6/11	読んだ本のページ数	50	50
6/11	読んだ本のページ数	29	52
6/11	読んだ本のページ数	77	60
6/11	読んだ本のページ数	99	60
6/11	読んだ本のページ数	103	78
6/12	読んだ本のページ数	31	81

② ファミリー読書週間

春のゴールデンウィークと秋の読書週間に、全校児童と保護者も巻き込んだ「ファミリー読書」に取り組んだ。学校が、子どもの読書活動を積極的にすすめていることに賛同して

くださる家庭も多く、家族で楽しく読書に取り組んだ感想がたくさん寄せられた。家族から児童へ、児童から家族へ読み聞かせをしたり、同じ時間にそれぞれの本を読んだり、町内の図書館へ出かけたりするなどの活動から、各家庭で好きな活動を選んで取り組んだ。活動後には、「お母さんに読み聞かせをしてもらったのは、ひさびさで、楽しいなと思いました。

(児童)」や、「みんなで、静かに本を読む時間もいいものだなと思いました。(保護者)」などの感想が寄せられた。

③ 出前図書館

町立図書館と連携し、参観日の下校時刻に図書館の本を借りることができる「出前図書館」を開設した。多くの家族の利用があり、盛況であった。学校の図書室にはない本を興味深く選ぶ児童や、家の人と、どれにしようかと楽しそうに選ぶ親子の姿が多く見られた。同じ時期に、「ファミリー読書」週間も計画したことで、出前図書館で選んだ本を家庭で、一緒に読んだ感想も多く見られた。



3 成果と課題

令和7年度のスタート時には、3校から集められた図書を図書館に配架することができた。各教科で使われる資料も充実し、スムーズに4月からの図書館活動が始められている。たくさん本の喜ぶ児童の様子も見られた。

また、図書委員会にも希望者が多く、委員会活動にやる気をもって取り組んでいる。リモートで話題に上がった読書活動も提案され、新しい学校に合わせた計画が進んでいる。

4 おわりに

閉校・統合と児童にとって期待と同時に不安も多い中、読書活動がスムーズに移行し、図書室が児童の学習を支え、わくわくする場所となるよう、学校司書をはじめたくさんの人の関わりで進めることができた。今後もこのよい流れをつないでいくことができるよう、学校全体で取り組みを続けていきたい。

委員会活動，授業での地域の図書館・書店と連携した読書活動の取組

総社市立総社西中学校 教諭 太田 拓志

1 はじめに

本校は，総社市内を南北に流れる高梁川東岸沿いに位置し，市中心部にある中学校である。

生徒数は，777 名，第 1 学年 7 クラス，第 2 学年 8 クラス，第 3 学年 7 クラス，特別支援学級 4 クラスの合計 26 クラスで，落ち着いた学校生活を送っている。本校では，「お互いを尊重し，自ら考え，判断し，行動できる生徒の育成～人・物・時間を大切に～」を学校目標に掲げ，生徒会活動や部活動に熱心に取り組んでいる。

図書館は，全校生徒が比較的利用しやすい 1 階にあるが，生徒数に対して図書館が狭くせつかくの蔵書も手に取りやすいとは言えない状況である。司書は，専任で配置されており，授業や通常の利用，委員会活動にも関わっている。

季節や行事，タイムリーな話題に沿った本の別置には，生徒も注目するので，頻繁に行うように心がけている。そこから興味・関心を知ることができるので，さらに選書にも繋がり，利用の増加に結び付いている。

学校では，始業前の 10 分間「朝読」の時間を設定し，本を読む習慣づけを図っている。すぐ手に取りやすいように，各クラスに常時本を置き，定期的な入れ替えや管理を図書委員会が中心となって行っている。

開館時間は，午前 8 時 55 分～午後 4 時 30 分。貸出・返却が可能な時間は，昼休み，放課後。貸出冊数は 3 冊，貸出期間は 2 週間となっている。

2 本校の取組

(1) 図書委員会の活動

図書の整頓，図書だよりの発行，昼休みと

放課後のカウンター当番，学級文庫の管理，読書月間のイベント企画・運営を行っている。

前期図書委員は，7 月に学級文庫の購入に携わる。事前にクラスでアンケートを取り，それに基づき，直接地元の書店で本を購入する。予算が決まっているので，電卓を片手にクラスの希望とすり合わせながら，選書する様子は真剣そのものだ。



また，読書週間には，朝読の時間を利用し，全校一斉読書（タブレット使用），人権週間には，人権に関する絵本の読み聞かせを実施。ほかにも図書委員会考案の SBG（クラス対抗しりとりブックゲーム）や本の福袋の開催など，時機に応じた取り組みを工夫して行っている。



今年度から総社市内の中学校は，部活動の朝練習がなくなり，本校の生徒は，朝 8 時以

降の登校となった。昼休み、放課後の利用が少なかったため、この機会に朝の開館（月・水・金の8:05～8:20）を始めている。滑り出しは好調で、朝読の本を借りに来たり、登校後教室に行く前にゆったりと過ごす時間に利用したりするなど、様々な図書館利用が始まっている。朝の開館を始めてから、約100人の利用があり、昼休み、放課後の利用にも繋がっている。

（2）授業での地域図書館との連携

総社市では、図書館検索サイト「カーリル」で市内の図書館、小中学校の蔵書が検索可能である。なるべく生徒からのリクエストに応えたいが、予算の都合上、購入が難しい本は、相互貸借を利用している。また、授業で複数冊本が必要な時、収集するのにも便利である。

（3）授業実践

1年国語（光村図書）

「大人になれなかった弟たちに・・・」

米倉 齊加年

【目標】関連する本などを読み、自分の考えを広げる。描写を基に、登場人物の行動や心情の変化を捉える。（5時間扱い）

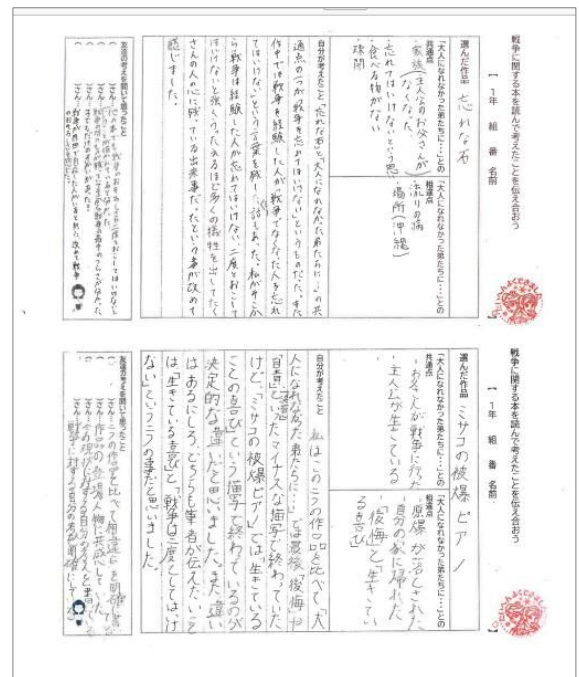
本教材を学習した後、関連する本などを読み、戦争や平和について自分の考えを書かせる授業を行った。

学習計画のついた振り返りシートで見通しを持たせ、本教材の学習に入った。「大人になれなかった弟たちに・・・」を読んでいく中で、登場人物の心情を読み取り、作者の伝えなかった思いを自分の言葉でまとめさせた。その後、関連する本を読み、「大人になれなかった弟たちに・・・」の内容と比べ、共通していること、相違していることを見つけ、戦争や平和について自分が考えたことをまとめさせた。自分がまとめたものを友達と交流し、自分の読んでいない本の内容を紹介してもらったり、友達の考えを聞いたりした。

関連する本は、学校司書の力を借り、絵本を中心になるべく文字数の少ないものを選書してもらった（1クラス33人に対して16冊

程度）。人数分は難しかったが、協同学習班にして、2人で1冊を一緒に読んでいる生徒もいた。

年間を通して、漢和辞書、国語辞書、本のPOP作り（優秀作品を校内掲示、学校図書館掲示）、古典学習で活用する資料など、授業に必要なものを準備してもらい、学校図書館を活用している。タブレットで足りることが増えたが、資料を取捨選択し、授業準備に協力・連携できていることが学校図書館の活発な利用につながると思われる。



（生徒のワークシート）

3 おわりに

授業でタブレットを活用するようになり、紙媒体のものを準備しなくても生徒は個人個人で資料等を活用できるようになってきている。しかし、ネット上には、数限りなく資料があふれており、それを取捨選択することに時間と労力が必要になる。限られた授業時間の中で、効率よく生徒に活動する時間を確保するためには、資料をある程度こちらで選択した上で生徒に示すことも必要であると感じる。

授業に関連する本、資料の準備を学校司書と連携し、確かな情報と深い学びを生徒に提案するためにも、学校図書館の役割は大きいものと考えられる。

岡山の高校図書館がつながる！ でーれーBOOKS のこれまでとこれから

岡山県立水島工業高等学校 司書 中村 恵

1 でーれーBOOKS の紹介

(1) 「でーれーBOOKS」とは

「岡山の高校図書館プレゼンツ でーれーBOOKS」は、2013 年度にスタートした岡山の高校司書によるおすすめ本コンテストである。高校生が読書を楽しみ感じられる本、読書が役に立つと感じられる本を推薦することを目的としており、小説以外の本を選考対象に毎年開催している。

でーれーBOOKS の選考には岡山県内の高校司書（高校図書館業務従事者）であれば、校種、雇用形態や専任・兼任等の勤務形態に関わらず参加することができる。選考はエントリー、1 次投票（ノミネート作品決定）、2 次投票（受賞作品決定）の順に Google フォームを利用して行われ、毎年 2 月に受賞作品が発表される。

高校生によい本との出会いを届けたいという思いから始まったでーれーBOOKS であるが、県下の高校図書館が協力してコンテストを運営することで、岡山の高校図書館全体を盛り上げていくきっかけとなったり、選考に関わることで高校司書のスキルアップにつながったりといった効果も期待されている。

(2) 「でーれーBOOKS 2025」について

12 回目となる「でーれーBOOKS 2025」では、『イタリア女子が沼ったジワる日本語』（テシ・リッソーリ／著）が大賞を受賞した。本書は、イタリア人である著者が日本各地を旅しながら拾い集めた「ジワる日本語」をまとめた一冊である。外国人の視点から日本の言葉や文化の面白さに気づかせてくれるだけでなく、好奇心旺盛で行動力のある著者の姿も魅力的である。

2 でーれーBOOKS の運営について

でーれーBOOKS は、岡山県高等学校教育研究会学校図書館部会の下部組織である岡山県高等学校図書館ネットワーク研究委員会が企画・運営している。

ネットワーク研究委員会は、県下の高校の生徒が情報格差を受けることなく学べる環境を得られるよう、学校図書館の新しい連携の在り方等を研究することを目的に設置された委員会である。

でーれーBOOKS 運営の実務的な作業は、委員会内の読書推進班である 3 名で行っている。具体的には、エントリーや投票に使う Google フォームの作成・管理、エントリー本がルールに沿って投稿されているかのチェック、学校図書館部会のウェブサイトの情報更新などであり、コンテスト終盤には、ポスターやチラシ作成のためのデザイン依頼、印刷発注、掲載する本の著作権の許諾や大賞受賞本の作者からコメントをもらうなど、出版社とのやりとりも行っている。

3 でーれーBOOKS のこれまでとこれから

(1) でーれーBOOKS のこれまで

でーれーBOOKS は、2004 年に始まった本屋大賞とそれに続けて他県で始まった学校図書館独自のコンテスト設立の動きに影響を受け、2013 年度に始動した。2014 年 2 月に受賞作が発表されたことから、初回は「でーれーBOOKS2014」となっている。

初回の「でーれーBOOK 2014」は小説部門と一般書部門の 2 部門制であったが、第 2 回の「でーれーBOOKS 2015」以降は小説部門を廃止し、小説以外の作品のみを対象として選考を行っている。これは、普段手にとることの少ない小説以外の本にスポットを当てることで、幅広い読書へのきっかけづくりとなっており、ほしいという意見を反映させたものである。

その他にも、毎年コンテスト後に実施するアンケートで寄せられた意見をもとに検討を行い、ルール等の変更や運営方法の改善を重ねてきた。主な変更点は以下のとおりである。

【第7回（でーれーBOOKS 2020）～】

- ・コミックエッセイを含む漫画を対象外に
- ・ノミネート本を10冊から5冊に変更
- ・2次投票はノミネート本を全て読んで投票
- ・参加条件の見直し（司書教諭や図書課に相当する分掌の教員は対象外に）

【第8回（でーれーBOOKS 2021）～】

- ・フォームによる投票を開始
- ・ポスター等のデザインを県内デザイン科の高校生に依頼
- ・ポスター印刷を外注

このように参加者の意見を取り入れていく中で、コンテストの質を高めつつ、参加のしやすさ、運営側の負担軽減、広報力の強化などを図ってきた。

（2）10周年記念事業

企画開始から10周年を迎えたことを記念し、2023年度には記念事業として図書委員交流会を開催した。県内14校から32名の図書委員が参加し、過去のでーれーBOOKS大賞本を読んで意見を交わし、読書ボードを作成しながら交流を深めた。生徒からは「同じ本を読んだ人と話すことの楽しさを感じた」「本の内容から会話がどんどん広がって楽しかった」などの感想があり、でーれーBOOKSの活動が高校生に読書の楽しさを伝える一助となれていると感じることができた。

また、図書委員交流会の様子や過去10年分のノミネート作品などをまとめた10周年記念リーフレットの発行、スタンプラリーカードの作成、岡山文芸フェスティバルへの参加などの事業を行った。

（3）成果・課題と今後に向けて

でーれーBOOKSの活動は高校生に本を紹介するだけでなく、高校司書の抱える悩みにも寄り添ってきた。経験の浅い司書や事務等との兼務のために図書館業務に避ける時間が少ない司書にとって、他の司書が選ぶおすすめ本は選書の参考になり、自校の生徒に自信を持って薦めることができる。また、各校に配布されるポスターやチラシ、ウェブ

サイトからダウンロードできるロゴやキャラクターの素材は各校での展示コーナー作りにも活用されている。

ポスターとチラシは県内の公共図書館や書店にも配布している。例年、いくつかの図書館や書店ででーれーBOOKSの特集を組んでくださっており、高校図書館の活動を広く知っていただく機会にもなっている。

このように、でーれーBOOKSの活動を通じて培ってきた高校図書館同士の連携や一体感、公共図書館や書店等との繋がりは何よりの成果であるといえるだろう。

一方で課題となっているのは参加率の向上である。これまでもより多くの司書が気軽に参加できるように柔軟なルール変更等を行ってきた。しかし、忙しい業務の中、コンテストに参加することが負担となる司書も多いことから、より多くの司書が参加できるようこれからも参加者目線に立った工夫を続けていく必要がある。

今後でもでーれーBOOKSの活動の意義を共有しつつ、参加者の意見を柔軟に取り入れていくことで、より参加しやすい仕組みづくりを目指すとともに、よりよい本を届けることのできる質の高いコンテスト運営に取り組んでいきたい。また同時に、でーれーBOOKSを多くの人に知ってもらえるよう、内外に向けより積極的な広報活動を行っていくことも必要である。

私たち高校司書は本の専門家であり、高校生の読書活動の最も身近な支援者である。これからもでーれーBOOKSの活動を通じ、高校生により本との出会いを届けていくとともに、本を読むことの楽しさ、素晴らしさを伝え続けていきたいと考えている。



〈岡山県高等学校教育研究会学校図書館部会ウェブサイト〉

<https://okayama-hslibrary.com/>

楽しい読書のために、図書と機会を提供する

津山市立高田小学校 教諭 谷本健太郎

1 はじめに

本校は、全校児童 92 名の学校である。読書の好き嫌いについて尋ねたら、「好き」に分類される回答をしている児童は 50 名いた。8 名の児童は「嫌い」の分類に回答している。残りの児童は「普通」と回答している。より多くの児童が読書の魅力に気づけるよう、高田小の取り組みと、加えてそれを支える市の体制を紹介する。

2 具体的な取り組み

(1) 高田小学校

① おすすめ 200 選

小学校生活 6 年間で 200 冊を読むチャレンジ企画。各学年に、その学年に応じた 20 冊から 50 冊のおすすめ図書を配当。主に物語の本を並べている。

児童は、学級生活のすきま時間や朝読書の時間を利用しそれらを読んでいる。また、本に親しませる際には、その棚から優先的に選び、担任が読み聞かせをすることもある。「モチモチの木」「ごんぎつね」など国語科で扱うものも用意されている。

学年が上がれば文字数も増えてくる。だからこそ、児童が歳相応の文字数を読むことに挑戦することにもなる。

各教室で 30 冊くらいの本を共有するので、同じ本を読んだ子どもたち同士で、話を共有することができる展開も魅力の一つである。

全部読んだ児童には、校長から表彰状を渡している。

② 光文庫

地域の岸本光麿氏が、善意で毎年たくさんの本を高田小学校に寄贈してくださっている。

岸本氏の名から「光文庫」という名の本棚を作成し利用している。児童には、子どもたちの心の成長や学力の向上のために、図書が非常に有効であるという岸本光麿氏の思いと感謝の意を伝えている。

長年の経験を積まれ、その中で地域の発展に尽くされてこられた、岸本氏の読書を重要視する心を受けとめてもらいたい。

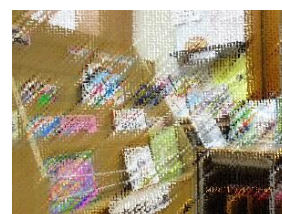
③ みつばち文庫

(株)山田養蜂場の方針「次世代を担う子どもたちに『豊かな心』をはぐくんでもらいたい…(以下略)」(山田養蜂場HPより引用)による、全国の子どもたちに無償で図書を提供してくださる企画がある。保護者の中から力をお貸しくださる声もあり、大変助かっている。毎年応募し図書の充実を図っている。

④ 廊下や貸し出しカウンターの掲示

図書室前の掲示板や貸し出しカウンターの近くでは展示を行い、図書室や全国の図書事情に気軽に触れられるようにしている。

新着図書、SDGs や L G B T Q などをテーマにした図書、季節を感じられる図書などをジャンルごとに整理している。



⑤ 図書だよりの発行

月に 1 度図書だよりを発行し、普段図書室に行く児童だけでなく、あまり行かない児童や家庭にも情報を発信している。すでに述べたことに加え、図書室の利用の様子も伝え、誰もが図書室のよき利用者となるような指導

を教室や家庭に呼びかけている。夏休み前には、読書感想文の書き方等も伝え、取り組みやすくしている。

日本紙幣の改訂に伴い、9月には「渋沢栄一」に関わる図書を紹介したりクイズを出したりした。国内外の情勢に目を向けたり好奇心をくすぐったりするような記載があるのも魅力的である。

(2) 津山市の取り組み

① ぶっくまる

津山市の小学校には、月に1回程度、津山市立図書館から自動車図書「ぶっくまる」が来校する。

学校では用意できない本がたくさん来る。昼休みの20分間利用できる。給食時間に自動車がやって来て準備を始めるが、窓からその様子を見た子どもたちは大喜びである。

② 津山市立図書館からの取り寄せ

国語、社会、総合的な学習の時間を中心とした調べ学習の時は、たくさんの図書が必要となる。

図書整理員と連携をとり、校内の図書に加え、市の図書館に貸し出しの手続きをしている。

数日すればたくさんの図書が届く。貸し出し期間は1か月程度と、一単元の学習としては十分な期間借りることができる。

③ 市内の学校で方針を共有

読書の在り方や図書室の利用の理想は人によって違う。

文字を読むことを重要視し、図鑑など絵を中心としている図書の貸し出しに制限をかける図書室もあるし、本への興味を持つことに重きを置き制限のない図書室もある。本を囲んだ子ども同士の関わりを大切にする図書室もあれば、一人の世界で楽しむ雰囲気を作っている図書室もある。

優劣はないし、その場のルールに従うことがマナーでもある。各図書室の方針ではあるが、その意図などを交流し、よりよい読書の在り方を検討している。

(3) 授業で読書時間を確保

① 授業で図書の時間を配当

1～4年生は週に1回、図書室で読書をする時間を設けている。高学年は、月に2～3

回の確保を目標としている。

② 朝読書

毎週金曜日に15分間実施。

③ ボランティアの方による読み聞かせ

月に1度、ボランティアの方々にご来校いただき、各教室で15分間の読み聞かせをしてもらう。

少しの緊張の中、これから読む本の内容や読み終えた後の話など、地域の方と本を紹介する会話も子どもたちの心を動かしていることが、表情から見て取れる。

(4) 児童が発信

① 図書委員会の活動の充実

- ・おすすめ図書の紹介
- ・図書みくじ
- ・貸し出しの手続き
- ・ポスター作製
- ・図書登山、図書ツリー（学年単位のスタンプラリー）

② 国語科での作品を交流

- ・リーフレットづくり
- ・読書感想文
- ・帯
- ・図鑑の交流



3 おわりに

読書は自己の領域にない表現や考えに触れることができる。それは、心豊かな大人に育っていくのに必要なことである。図書は場所や時代を超えた交流ができるものである。だからこそ、早い段階で子どもたちにもその魅力に気づいてもらいたい。これからの教育活動で、読書の魅力を伝えていく次第である。

美勝英支部8中学校の現状と取組 ～豊かな心を育み、読書の楽しさを味わわせるための図書館との連携～

美作市立美作中学校 教諭 畑 絢二郎

1 はじめに

美勝英支部は、岡山県の北東部に位置している。中学校は美作市に作東中学校、大原中学校、英田中学校、美作中学校、勝田中学校、勝央町に勝央中学校、奈義町に奈義中学校、西栗倉村に西栗倉中学校と計8校がある。

それぞれの学校には図書室（図書館）が設置してあるが、図書館司書のいる曜日などは異なる。今回の発表では、このような状況の中で図書館教育担当になった教諭が、それぞれの学校で、どのような工夫をして図書室の利用指導を行っているか、その取組の一端を報告する。

2 本研究のねらい

- ・図書館を利用して、生徒主体の表現活動を工夫する。
- ・様々な教科や教育活動で図書館活用の教育を推進する。

上記2点のねらいのもと、各校で行った実践を紹介する。

3 各校の実践

(1) 教科での取組

① 美作中学校

絵本ビブリオバトルを行った。はじめに、ビブリオバトルについて知るために、実



際の映像を見てポイントを知った。その後の時間ではビブリオバトルの準備として、自分の好きな絵本や、学校司書の先生が準備してくださった絵本の中から1冊選び、構成を考え、練習をした。そして、実際に班ごとでビブリオバトルをおこない、チャンプ本を決めた後に、クラスでビブリオバトルを行い、チ

ャンプ本を決めた。ブックルームの活用の仕方を生徒に伝えることになった。

② 勝央中学校

「私の故事成語活用法を執筆する」ことを行った。今回の実践では図書館の蔵書を使用して、自分の身につけたい「故事成語」の材料を集め、「エピソード」「座右の銘」「友人に贈る言葉」「四コマ漫画」「物語」など、生徒たちの興味・関心・特性に応じて選ばせることで自分の学習が最適となるように調整して学びを深められるようにした。授業後のインタビューでは「図書館にこんな本があるとは思わなかった。インターネットはすぐに答えがわかるが、図書館の本はきちんとまとめられていて楽しかった。特に由来がわかりやすくして他の故事成語も調べたい」と意欲的であった。

③ 英田中学校

国語科の取組として全学年でポップ作りを行った。学校司書の先生にポップの説明や見本を示していただいた後、それぞれが本を選び、授業でポップを作成した。キャッチコピーを考えたり内容をまとめたりしたものを、ゲーグルスライドを使って作成した。完成したポップを画面に映し出し、クラスで紹介した。発表を見ながら「続きが気になる、読んでみたい」というつぶやきが多く聞こえてきた。できあがったポップは図書室に掲示したり全学年共通のポップルームにアップしたりしていつでも見えるようにしている。



④ 大原中学校

「本の処方箋」というテーマで自分の読ん

だ本を、様々な状況の誰かを想定して、紹介する取組を行った。まず、本から感じたこと・学んだことなどを短い文章であらわし、どのような場面や言葉から感じたのかをまとめ、それをもとにして、本の処方箋を書いた。(表面：上部 ○○なあなたに, 下部 本のタイトル, 裏面：本のあらすじ, 魅力などの紹介) 完成した作品は、図書館近くの掲示板などに掲示し紹介した。

⑤ 西栗倉中学校

西栗倉中学校では2つの取組を行った。

1つ目は、オーストラリアから来日した生徒との読み聞かせの交流を行った。同じ内容の絵本を日本語版、英語版で用意し、それぞれの言語で読み聞かせをし合った。村内の読み聞かせボランティアの方からアドバイスをいただきながら、「相手に伝える」という意識をもって、読み方を工夫する生徒の姿が見られた。



2つ目は、「ものがたり給食」の動画制作を行った。西栗倉村が実施している「ものがたり給食」は、ある食材を題材にした絵本の読み聞かせを聞きながら、その食材を使った給食のメニューを楽しむ取組である。いつもは村の図書館司書が読み聞かせを担当するが、今回は中学生が制作した動画を村内の各校園で流した。動画では、絵本の読み聞かせを行ったほか、シリーズ本の紹介もした。自分たちで絵本の内容を解釈し、その魅力を伝えられるように工夫しながら動画を撮影した。

(2) その他領域での取組

① 勝田中学校

文化委員会の取組として全校生徒で百人一首のしおり作りをした。まず、文化委員が他の生徒に説明できるよう事前に下調べをし作品例を作り、他の生徒にしおりの書き方を説明した。その後、自分がしおりに書く和歌を選び、図書室の本やインターネットなどで、和歌の意味や解釈を調べ、しおりを作った。できあがったしおりを友達と共有し意見交換を行った。それらを集め、文化委員で優秀作

品を選び、集会で表彰した。クラス発表会で展示したり、図書室に飾ったりして多くの人に見ていただいた。その後、生徒一人ひとりに、他の人のしおりが渡るように配った。

② 奈義中学校

奈義中学校では2つの取組を行った。

1つ目は、文化委員会による先生のおすすめの本・夏休みに読むおすすめの本の紹介を行った。本と出会う機会づくりになり、実際紹介されていた本を夏休みに読み、読書感想文に書き上げてくる生徒も見られた。

2つ目は、地域住民による読み聞かせを行った。地域の方々と関わりながら本に親しむことができた。

③ 作東中学校

生徒会文化委員会で小中の図書館司書と連携し、例年読書週間にあわせて児童・生徒が本に興味をいだくようなコラボイベントを実施している。2024(R6)年度は、岡田よしとか作『ぼくらはうまいもんフライヤーズ』という絵本を題材に、揚げ物(フライ)と本をかけあわせたキャラクターを募集し、各学校の作品に一人1票ずつ投票した。得票数の上位3人を表彰するだけでなく、参加児童生徒全員に自分が考えたキャラクターをしおりにしてプレゼントした。

4 成果と課題

今回の成果としては、図書館を授業で活用し、本を用いた活動をしたことにより読書への意欲・感心を高めることができた。また、他者に伝えることを意識させたため、主体的に魅力を探し、工夫して表現することができた。

今回の取組を通しての課題として、図書室の休み時間や授業での利用を増やすことが必要であると感じた。しかし、開館時間の制限があるので、そこを補う工夫が必要である。

5 おわりに

今回の発表を通して、国語の授業や委員会などでの図書館の活用、生徒主体の表現活動の工夫についての取組を知ることができた。今後も楽しい読書活動に向けて、教科のみならず様々な視点から働きかけができるように、連携してくることが大切であると感じた。

心地よい居場所としての図書館作り ～図書委員会・国語科の取組～

岡山県立東岡山工業高等学校 教諭 石山 奈都子
司書 小橋 暁子

1 はじめに

(1) 本校の紹介

本校は、岡山県岡山市の中心部から東に約9kmの東岡山駅近くに位置している。全校生徒は約800名、1年生は機電子科5クラス、工業化学科・設備システム科各1クラスの計7クラス、2・3学年は機械科、電子機械科が各2クラス、電気科、工業化学科、設備システム科が各1クラスの合計21クラスで構成される。5つの専門科が特色のある授業や実習を展開しており、また小学校や公民館に出向き各科の知識を活かした出前授業をしたり地域の清掃活動が続けたりなどもしている。資格取得、生徒会活動、部活動、各種大会などに主体的に取り組む面もあるが、見通しを持って考えたり物事を俯瞰的に捉えたりする思考力や判断力が未熟な部分も見られる。

(2) 本校の図書館

本校の図書館は、第1棟2階にあり廊下の東端に職員室、西端に図書館という生徒や教員が行き来する恵まれた環境下にあり、定期考査や資格取得のための自習室としてなど、比較的多くの生徒が訪れそれぞれの時間を過ごしている。

しかし、読書に関してはスマートフォンなど電子媒体の普及とともに読む生徒と読まない生徒の二極化が進み、全体的としても読書時間の減少を感じる。そこで、改善に向け読書に親しむ生徒の育成を目指し、図書委員会・2年国語科で取り組んだ内容を紹介する。

2 具体的な取組

(1) 図書委員会の取組

図書委員会では意見を集約し令和6年度の活動目標を「楽しく過ごしやすい空間作り」とし、次のような活動に取り組んだ。

① 企画・展示・広報

図書委員が選ぶテーマ、「空を見上げたくなる本」「夏といえば?」「図書委員がすすめるミステリー」「〇〇部に推したいおすすめ本」などに因んだ図書を展示し、生徒の写真やおすすめコメントを添えることで親近感が湧き手に取りやすくなるようにした。

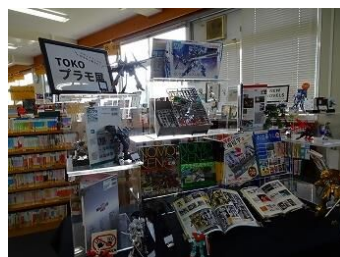


〔空を見上げたくなる本〕 〔部長のおすすめ本〕

また、「部長のおすすめ本」では各部長にインタビューし、部長の写真とコメントを展示した。身近な存在からの発信は本選びに迷う生徒の興味を刺激し貸し出しにつながるので数年続けている。

「東工プラモデル展」では生徒作のプラモデル横に、部品を創る仕事やその過程に関する図書を展示した。また、昨年度はSDGsの取り組みとしてランナー回収箱を設置した。

「読書マラソン」では、図書館の扉にマラソンポスターとクラス駒を掲示し、担任と生徒を合わせた貸出冊数をクラス対抗でカウントした。視覚的効果もあり読書に親しむきっかけ作りとなった。



〔プラモデル展〕



〔読書マラソン〕

② その他の活動

東工祭では、工業高校の特徴を活かしものづくりの技術を展示に活かすことを目標に生徒が主体的に取り組み、トリック再現・謎解き・トランプ銃・ボイスチェンジャーなどを製作し「名探偵コナン」の世界を再現した。当日は来館した在校生だけでなく、保護者や小・中学生に図書委員会の活動を伝えることができ図書委員の満足度も高かった。

また、新聞に親しむ取り組みとして、年 40 回 SDGs 新聞を作成した。担当の図書委員が新聞から SDGs に関する記事を選び、記事のポイントとコメントをまとめ教室や廊下に掲示してもらった。



〔東工祭〕



〔SDGs 新聞〕

また、図書館への呼び水としてボードゲーム・ルービックキューブ・アクアポニックス（水槽）など遊び心的な要素を配置しており来館者の確保につながっている。



〔アクアポニックス〕



〔ボードゲーム〕

（2） 2 年国語科の取組

「おすすめ本紹介と短歌作り」

① 授業計画

第 1 時	おすすめ本についてストーリーや 推しポイントをまとめる。
第 2 時	短歌の本を参考におすすめ本につ
第 3 時	いて表現した短歌を作る。

事前に館内の一面に短歌本コーナーの設置を依頼し、図書館での授業を計画した。

おすすめ本の紹介内容には、本のタイトル・著者名・出版社・本のストーリーや内容・推しポイントを入れること、Chromebook を使いスライド 1 枚にまとめること、余力のある生

徒は CANVA を使ったポスター作りや感想画にチャレンジするよう伝えた。

次に、教科書「短歌の構成と表現」について説明し、短歌本コーナーの本を紹介することで短歌を身近に感じてもらえるようにした。今年度はナナロク社の寄贈により新旧様々な短歌の本が揃っており、生徒は手に取って参考にすることができた。

1 年時から年に数回、俳句作りを課題にしていたこともあり、短歌への抵抗感もさほどなく自分なりに表現することができた。また、短歌を作る際に思い浮かべた情景をスライドにまとめるように伝え提出させた



〔短歌コーナー〕



〔授業の様子〕

② 図書館との連携

短歌コーナーを設置し、2 年生全員を対象に短歌作りの授業を試みたが、授業後に短歌の本を借りに訪れた生徒もおり図書館との連携による授業は読書喚起につながると感じた。

3 おわりに

（1） 各取り組みの振り返り

図書委員会としては、1 年間の取り組みを通して生徒の自主性を尊重し円滑に運営することができた。特に、生徒発信の企画・展示では学年を超えて協力し意欲的に取り組むことができた。

2 年生国語科としては、図書館を起点とした短歌学習により生徒の自由な発想や柔軟な思考につなげることができ、大学や地域が募集している短歌・俳句にも応募するなど言語への関心が深まった。

（2） 課題

Chromebook の導入後、調べ学習などでの図書館活用が減少したが、親しみを感じ居心地よく過ごせ、また新たな発見や知的好奇心に出会える図書館作りを目指すことで改善の余地はある。今後も授業など学校全体で、図書館と柔軟に連携できるよう読書意識の涵養を目指したい。

学校図書館活用で、今までの学びを生かしたくなる授業づくり ～もっと！読みたい、伝えたい～

岡山市立三勲小学校 教諭 高井 里紗
教諭 中山 晶葉
学校司書 三宅 真紀

1 はじめに

本校では、「ともに学び合う子どもを目指して～対話することで深い学びにつなげていく授業づくり～」を研究テーマとして、児童が対話を通して深い学びを達成するとともに、よりよい人間関係を構築することを目指している。

令和5年度からは、国語科「読むこと」の領域を中心にして授業実践に取り組んでいる。これまで、国語科の研究では、第二次の読解を中心に研究を進めてきた。中心教材の内容だけでなく、他の文章でも活かすことができるように、読み方の指導を大切にしてきた。そこで、今回の図書館活用の授業づくりでは、第二次の中心教材で読みの力を身に付け、第三次で図書館資料に読書を広げた時にも、その力を活用することができるようにしたいと考え、学校司書と次の連携を行った。

2 具体的な取組

単元名 分かったことを伝え合おう

「どうやってみをまもるのかな」

(東京書籍 1年上)

(1) 単元について

本教材は、動物が敵からどうやって身を守るのか、筆者の疑問提示に対して答えていくクイズのような形式で書かれており、子どもが楽しみながら興味をもって学習できる教材である。また、3種類の動物の特徴や生態がわかりやすく書かれており、説明文の基本的な読み方である「問い」と「答え」の読み方を、1年生でもつかみやすくなっている。そこで、「普段の様子」と「敵から身を守る様子」の2枚が対比的にかかっている挿絵も手がかりにしながら、内容の大体を捉えたり、分かったことを伝え合ったりする力を付けさせたいと考えた。

(2) 単元目標

- ・文の中における主語と述語との関係に気付くことができる。

【知識及び技能】(1)カ

- ・読むことにおいて、事柄の順序を考えながら、内容の大体を捉えることができる。

【思考力・判断力・表現力等】◎C(1)ア

- ・進んで事柄の順序などを考えながら内容の大体を捉え、今までの経験や学習を生かして、分かったことを伝え合おうとする。

【学びに向かう力、人間性等】

(3) 実際の授業(6時間)

① 第一次(1時間)

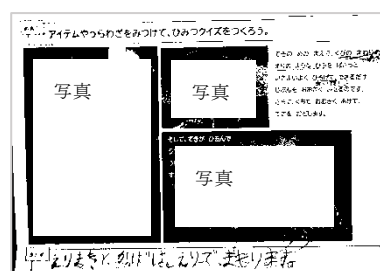
- ・3つの動物の普段の姿を掲示し、身の守り方を自由に予想する。
- ・題名を手がかりに教材への興味を高め、問いに答えることを楽しむ。
- ・動物の身の守り方を読み取っていくことを知る。

② 第二次(3時間)

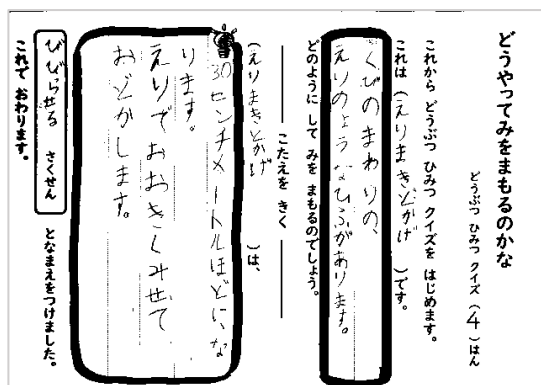
- ・やまあらし、あるまじろ、すかんくの体のつくりと身の守り方を読み取る。
- ・身の守り方をたしかめ、作戦名を考える。

③ 第三次(2時間)

- ・図書館資料を参考にしたワークシートから、動物の体のつくりと身の守り方について情報を集め、まとめる。
- ・動物の身の守り方クイズをする。



(情報を集める用のワークシート)



(4) 授業を振り返って

第二次までの学習の読み方を使って、図書館資料から他の動物の身の守り方を見つけて、動物ひみつクイズを作ることができた。低学年という発達段階から第二次の読み取りの時から「体のつくり」を「アイテム」、「身の守り方」を「裏技」と呼ぶことで、身近な言葉でイメージし、読み取った内容を共有しやすくした。

本時の活動において、児童によっては、図書館資料から自分たちで必要な情報を見つけることは難しいのではないかと考えた。そこで、体のつくりと身の守り方の関係が明確に繋がっている動物の資料を選び、情報を絞ったワークシートを作成した。情報を精選することは、全員が活動に取り組める手立てとして効果的であった。本単元の学習が終わった後には、学校司書から様々な動物の身の守り方についての本を多数紹介してもらった。すると、興味を持った児童が進んで本を手に取り、読書の幅を広げる姿が見られた。

今回は、指定した動物のクイズ作りをした。しかし、自分の興味に合わせて図書館資料から動物を選び、調べてまとめていくこともできるだろう。初めからワークシートを用いず、読み取りが苦手な児童のみワークシートを活用したり、学習段階に合わせたワークシートをいくつか作成したりすることもできたのではないか。本時の授業では、自ら様々な資料を当たって、本から必要な情報を選ぶとする姿勢はあまり見られなかった。課題として、授業者のねらいに応じて資料を絞るだけでなく、児童が自分から読んでみたいと思った資料を使うことができるようにする手立てが必要であった。

文章の読み取り方の活用という視点だけでなく、文章に主体的に向き合い、内容を理解する力を育てるために、読書の楽しさを感じられる視点も大切に授業づくりをしたい。

(5) 学校司書の視点から

授業での学校図書館からの支援としては、まず、調べ学習や一斉読書で利用する図書の提供を行っている。現在、教室利用するために担任が図書を借りて帰ることが多いが、図書館を利用した学習を行ってもらえるよう担任への声掛けを増やしていきたい。特に、調べたり本を他者に紹介したりする学習の場合、図書とタブレット端末を併用でき、担任と共に学校司書が授業支援を行えるという利点がある。

また、図書の時間には学習関連図書の紹介や読み聞かせを行い、児童自ら手に取って読めるようにしているが、紹介した図書に興味を持った児童だけが読むのではなく、クラス全員で一斉に関連図書を読む時間も必要と感じる。

3 おわりに

今回の授業実践を通して、第三次で児童が主体的に読むことができるようにするためには、第二次までにどのような力を児童に身に付けさせたいのか、具体的に想定した単元計画が大切であることが分かった。

また、今回は第二次までに習得した思考力・判断力・表現力を進んで生かすことを主体的に学習に取り組む態度として評価した授業づくりであったが、第三次の主体的に学習に取り組む態度の想定の仕事も様々であることが分かった。授業者のねらいが変わってくれば、学校司書に依頼する図書館資料の幅も広がってくるだろう。

本校では国語科以外の様々な授業でも、授業者と学校司書が相談することで、授業のねらいに応じた資料が用意されている。

これからも、授業者のねらいを具体的にして学校司書がそれぞれに合った資料を用意することで、児童の進んで読書をしようとする態度や、読書を通して分かったことを友達と伝え合いたいという心を育てていきたい。

ICT時代の学習センターとしての学校図書館

瀬戸内市立長船中学校 教諭 直原 絵美

1 はじめに

和気・瀬戸内支部は、和気町立和気中学校、和気町立佐伯中学校、瀬戸内市立牛窓中学校、瀬戸内市立邑久中学校、瀬戸内市立長船中学校からなり、いずれも豊かな自然に囲まれた地域である。学校規模に違いはあるものの、各校の特色ある教育活動を生かし、5校共通のテーマを設定して取組を行うことにした。

まず、5校の全校生徒を対象に、R6年度の1学期に行ったアンケートでは、教科以外での利用は80%に上ったものの、教科の授業での利用は57%と、教科の学習場面では、利用率がそれほど高くないという結果になった。教科の学習において、学校図書館を利用しない主な理由は、「インターネットで調べ物をするので、活用する必要がない」が最も多く、次いで、「学校図書館の利用方法や情報の調べ方がわからない」が多かった。

これらの結果から、5校共通の課題として、以下の4点が挙げられた。

- ・タブレットから得られる情報に偏っている。
- ・自分で本を探したり、選んだりすることが難しい。
- ・長い文章を読むことが苦手な生徒が増え、視覚的なものや短編を好む傾向がある。
- ・生徒も教員も時間的な余裕がなく、学校図書館を十分に活用できていない。

これらの課題から、「学習センターとしての学校図書館の活用」を研究テーマに、

- ・学校図書館とICTをつないで、それぞれのよさを生かした指導方法を確立する。
- ・様々な資料を通して、情報や知識を広げ、新しいものの見方や考え方に触れさせる。

という2つの観点で取組を実施した。

- (1) 学校図書館とICTをつないで、それぞれの良さを生かした指導方法を確立する。

① 好きな故事成語を選ぶ

(牛窓中 1年国語)

本とインターネットを併用し、自分で情報を取捨選択しながら、好きな故事成語を選ぶ。タブレットで選んだ故事成語の意味と成り立ちをまとめ、意味を理解した上でそれを使った文を作る。



② 読書感想文を書こう(長船中 1年国語)

タブレットで「本の検索とブックレビュー」「おすすめの本診断」「本の検索」を利用し、本についてのレビューを参考に、読みたい本を探す。自分でブックレビュー(ワークシート)を完成させ、それを基に読書感想文を書く。

A worksheet titled "おすすめの本 ブックレビュー" (Recommended Book Book Review). It includes fields for "タイトル" (Title), "著者" (Author), and "出版社" (Publisher). The main section is "どんなお話?" (What's the story about?), which contains a detailed review of the book "飢餓と貧困" (Hunger and Poverty) by 西・世界の子どもたち (West, Children of the World). The review discusses the book's content, its relevance to the current situation, and the author's perspective. There are also sections for "おすすめポイント" (Recommended points) and "読むとどんな気持ちになる?" (How will I feel after reading?). At the bottom, there is a section for "こんな人におすすめ!" (Recommended for people like this!) with a brief description of the target audience.

- (2) 様々な資料を通して、情報や知識を広げ、新しいものの見方や考え方に触れさせる。

2 具体的な取組

① 聞き上手になろう～お勧めの本を探す～
(邑久中 2年国語)

ペアになった相手から、読みたい本のイメージをインタビューで聞き、お勧めの本を探す。奥付の内容、分類番号の内容を書き留める。お勧めの本を受け取ったら、本を読み、奥付や本の内容をまとめ、感想文を書く。NDC（日本十進分類法）や奥付について学ぶことも目的とした。

② 作品の魅力を伝えよう(佐伯中 2年国語)

説明文「君は『最後の晩餐』を知っているか」を学習後、絵画の鑑賞文を書く活動に取り組んだ。絵画は美術の資料集から選び、その絵について調べる際に、本とインターネットを併用した。インターネットで得た情報について、本で確認したり、構図や色彩などの絵画を鑑賞する際の視点を本から読み取ったりしていた。

③ 根拠を示して説明しよう

～資料を引用してレポートを書く～
(和氣中 1年国語)

身近なテーマについての統計資料などを引用し、調べたことや考えたことを伝えるレポートを書く。必要な情報を収集する際に、手段は生徒が考え、選択した。タブレットを使う生徒もいれば、書籍を使う生徒もいた。欲しい情報（書籍）がある際には、司書の先生に声をかける生徒の姿も見られた。



特に、学校図書館の活用率については、取組後のアンケートの結果、自主学習を目的とした利用率が上がっていた。また、「今後、どのような機会に学校図書館を使いたいか」という問いに対して、「自習や家庭学習に関すること」と答えた生徒の割合が上がっており、授業で学校図書館を使うことが、生徒の学びを広げることにつながるという結果になった。

また、授業者である教員にも学校図書館を授業で利用する工夫を呼びかけたことで、学校図書館の利用頻度も上がっているという結果が得られた。授業で利用する機会を増やすことで、読書への関心を高めたことがわかった。

一方、課題としては次のような点が挙げられた。

- ・情報の新しさや幅広さに対応できる図書資料
- ・図書館を活用するための計画や時間的な余裕
- ・手段としての図書館活用を推進する必要性
- ・図書館の活用方法を教員全員で検討する必要性

生徒は一人一台端末の普及により、必要な情報をいつでも手元のタブレット端末で調べることができる。しかし、図書館（本）の良さもあり、生徒がそれを自覚できる機会を教員が意図的に作る必要があると感じた。

今後も、図書館司書やICT支援員、校内の教員で互いに連携を図り、生徒の主体的な学びがより充実するような学校図書館を目指したい。

3 おわりに

各校での取組の結果、成果として次のような点が挙げられた。

- ・情報の調べ方や検索・分類方法、知識の向上
- ・図書資料とタブレットの共存
- ・読書のきっかけ
- ・学校図書館司書やICT支援員との連携
- ・学校図書館の活用率の増加

学ぶ力を引き出す学校図書館を目指して ～ことばの力を培う授業と図書委員会の取組～

岡山県立笠岡高等学校 教諭 小原 千明

1 はじめに

本校は創立120年をこえる歴史と伝統のある普通科高等学校である。県南西部に位置し、1学年4クラスで地域との連携や国際交流等、さまざまな体験をとおして社会の中で役割を果たしながら自分らしい生き方を実現し、「志高く自らの人生と社会の未来を拓く人」の育成を目指している。

生徒の実態としては、学習に対して前向きで苦手の克服にも粘り強く挑戦する生徒が多い。また普段からiPadを活用しており、情報の収集や発信は得意である。一方で主体的に行動することにはやや消極的な生徒が多い。読書については、本校の2年次生を対象に実施したアンケートで高校入学後、本をほとんど読まないという生徒が43.8%という結果となり、読書の習慣がない生徒が多いことが課題である。

2 具体的な取組

(1) 2年次国語科の取組（ブックレポート）

国語科では生徒が新書を読み、ブックレポートを作成して発表する活動を行った。活動を通して普段読まない資料を活用して考えを深め、自分の言葉で伝え合う力を身につけることをねらいとした。

① 授業計画

第1時	新書選び（図書室）
第2時	ブックレポート作成
第3時	グループ内発表，相互評価

第1時では図書館司書から新書についてのガイダンスを行った。その後、図書館の新書コーナーを自由に見て回り、自分の興味関心のある分野に関する新書を一冊選び、レポートにまとめる内容を検討させた。今回のレ

ポートでは新書の記述から生徒自身の考察を深めさせることを重視したいと考えたため、必要に応じて新書以外の関連する資料も採させた。

第2時では読んできた内容を基にブックレポートの作成を行った。レポートを作成する際は総合的な探究の時間でも指導したレポート作成の作法（出典や引用の書き方等）に従うことや、本の内容だけでなく筆者の見解に対する自分の考えを詳しく述べるよう意識付けを行った。

第3時ではブックレポートをもとにグループ内発表と相互評価を行い、他者の考察に触れることでさらに知見を深める活動を行った。授業の終わりに振り返りのアンケートを実施し、取り組みの成果や学校図書館に対する意識の変化を調査した。

② 図書館との連携

新書を選ぶ際、司書から新書の種類や定義、ウェブサイト「新書マップ4D」を活用した検索の方法についてガイダンスを行った。「新書マップ4D」と学校の蔵書検索ページはQRコードが付いたしおりを配付し活用させた。

③ まとめ

実践ではこれまで培ってきた読解力を生かし、自分で選んだ新書を読むことを通して興味関心のある分野を筆者の視点から見つめ、考察を深めさせることができた。また、読み取ったことを自分の言葉にして伝え合うことで、読書を通して新たな考えを形成する態度を養うことができた。

(2) 1年次英語科の取組（Reading a Picture Book to friends）

学校設定科目「Global English I」で、絵コンテを作成し英語の絵本を読み聞かせする活動を行った。目標を「オーセンティックな

英語に触れながら、絵本の内容を理解する。」
「絵コンテを用いて、聞き手が楽しむことを意識した音読をする。」に設定し、9月から5時間の活動を行った。読み聞かせ本番は、校長、教頭、図書館司書、ALT、年次団の全教員に来ていただき読み聞かせを行った。

① 授業計画

第1時	絵本選び（図書室）
第2時	storyboard 作成（図書室）
第3時	storyboard 作成、音読練習
第4時	読み聞かせ
第5時	英作文 “What you learned from this activity. ”

第1時は、司書とALTに絵本の読み聞かせを行ってもらい、司書から読み聞かせのポイントについてレクチャーを受けた。

第2時は、iPadのアプリ「Goodnotes」で、選んだ絵本のstoryboard(絵コンテ)を作成した。ただ絵本を読むのではなく、文章や挿絵など本の世界観にじっくりと浸って欲しいという思いからstoryboardを作成させた。読み聞かせに用いるstoryboardは最大20枚まで、所要時間は5分と定めたので、文章を適宜要約した生徒もいた。



第3時は、読み聞かせの練習を行った。ルブリックを用いて、「声の大きさ」「読むテンポ」「読む態度」などを意識させた。単語を正しく発音できるよう、辞書アプリ「DONGRI」で発音を確認しながら練習をさせた。

第4時は、千鳥会館にて8～9人班を13班つくった。そして各班に教員が加わり、ルブリックに基づいて読み手の評価を行った。生徒は聞き手が楽しめるよう、抑揚や間をとったり、storyboardの見せ方を工夫したりした。その後振り返りシートで自己評価をさせた。

本活動後、“What you learned from this activity. ”をテーマにして英作文を書かせた。英作文は生成AI(ChatGPT)で添削・解説をしてもらい、書き直したものを提出させた。

② 図書館との連携

英語の絵本を生徒が一人一冊ずつ読めるように岡山県立図書館、笠岡市立図書館から150冊程取り寄せた。司書と協力しながら活動を行った。

③ まとめ

他校で実践されていた活動を参考にして本授業を行った。絵本を用いることで、1年次生でも無理なくオーセンティックな英語にふれながら内容を的確に理解することができた。そして、外国語を用いて、聞き手に伝わることを意識しながらコミュニケーションを図ろうとする態度を養うことができた。

(3) 図書委員会の取り組み

図書委員会では令和6年度、笠岡認定こども園を訪問し、絵本の読み聞かせを実施した。

読み聞かせに向けては、まず校外の図書館から取り寄せた絵本や紙芝居の中から生徒が読み聞かせのグループごとに本を選び、司書からのアドバイスを参考にしながら読み方やページのめくり方などの練習を繰り返し行った。また園児により楽しんでもらえるよう、読み聞かせの前に手遊びをし、指人形や名札を折り紙で作って持参し園児にプレゼントした。準備段階から工夫を重ね、生徒自身も楽しみながら積極的に園児と交流することができた。

3 おわりに

今回の授業実践では、図書館との連携を通して生徒が課題について主体的に考え、自分の言葉で相手に分かりやすく伝える力を養うことが出来た。図書委員会の活動では様々な本を通じた地域との交流に取り組んだ。

本校は図書館が教室から離れた場所にあることもあり、学校図書館を利用する生徒が少ないのが課題ではあるが、2年次国語の授業後の振り返りのアンケートでは授業を通して学校の図書館や図書館の本をもっと利用してみたいと思ったかという問いに対して「はい」の回答が60%となった。授業等を通して図書館の使い方を生徒に示すことも学校図書館の利用や生徒の読書への意識向上につながると考えられる。引き続き学校図書館との連携を図り、生徒が図書館を活用して主体的に考えて行動し、「学ぶ力を引き出す」環境を作りたい。

子どもの実態に即した読書活動 ～授業実践および心の居場所になる学校図書館について～

倉敷市立岡田小学校 教諭 久田 由貴
学校司書 山田 倫子
主幹教諭 岡本 博子

1 はじめに

(1) 本校の紹介

本校は岡山県倉敷市の北西部に位置している。通常学級7クラス，特別支援学級2クラス，計9クラスからなる全校児童180名の小規模校である（令和6年度）。また，平成30年には西日本豪雨で被災しており，児童の心のケアと防災教育に力を入れている。

(2) 本校の図書館

本校の図書館は，蔵書が約9300冊と充実している。令和6年度の貸出冊数が約24000冊で，一人当たり133冊と利用はかなり多い。一方で，個々の児童に目を向けると，情緒が安定せず自分で落ち着いて本を選ぶことができない，文字を拾いながら読むことが難しい，興味の幅が狭く偏った読書をしている実態がある。

そこで①子どもの実態にあった読書活動ができること，②児童の心が豊かになるような学校図書館を作り上げること，以上2点について重点的に取り組みを行った。

2 具体的な取組

(1) 学校全体の取組

① 朝読書の実施

本校の朝読書は，毎週月曜日の8時15分から8時25分までの10分間である。学校全体で5年前から継続的に行っており，誰もが読書に触れる時間を確保している。

② 学校支援ボランティアによる読み聞かせ

年間15回，朝読書の時間を活用して学校支援ボランティアによる読み聞かせを行った。ボランティアの方には，主に低学年や特別支援学級に出向いてもらい絵本や本の読み聞かせなどをしていただいている。

(2) 学校図書館の取組

① 利用しやすい図書館

児童が自ら読みたい本を見つけることも読書活動の1つと考え，十進分類法の分類記号・図書記号の分かりやすいサインを作成し，配架している。また，国語の教科書に掲載されている本を学年ごとに分けて特別コーナーを設置している。防災関連コーナーには，図書だけでなくパンフレットや新聞記事も含めた地域資料も充実させ，児童の防災学習に役立つ工夫をしている。



② 季節の展示コーナー

入口近くやカウンター前の展示机，低書架の上等，児童の目につく場所にタイムリーな展示コーナーを設けることにより，児童の好奇心を刺激し，本に興味をもち，自ら選書するきっかけをつくっている。

③ 心豊かな感性を養うために

気持ちが落ち着かない児童やじっと留まることができない児童には，絵本のキャラクターのぬいぐるみや，ふわふわ触感が心地よい布絵本で心を落ち着かせ，ページをめくるたびに，魅力的な仕掛けで集中力をアップさせるなど工夫を凝らしている。



④ イベントの開催

図書館でイベントを開催することにより、普段本にあまり触れていない児童も本と繋がるきっかけになっている。

ア 「すくなかぼちゃ」の数当てクイズ

ハロウィーンの時期に本の展示だけでなくかぼちゃの種を当てるクイズを行った。

イ 読書週間

毎年読書週間を2週間程度行っている。令和6年度はアニメーション「きつねがにげた！」&図書館宝くじや図書委員会によるパネルシアター、先生のおすすめ本紹介が行われた。

ウ 「食虫植物観察」や「かいこ観察」

本だけでなく実物の生き物を一緒に展示することによって児童の興味の幅を広げることにつながっている。



『むしをたべるくさ』ポプラ社
渡邊弘晴/写真 伊地知英信/文)



エ 図書館福袋

新年の運試しというわくわく感を味わいながら本との出会いを楽しむことができる。



(3) 授業の中で

授業の中でも各担任が本との関わりを大切にしている。学校司書とできるだけコンタクトを取り合い共通理解を図り、支援を必要とする児童の実態に寄り添っている。

① 2年生 国語科 「紙コップ花火のおもちゃの作り方」の授業での支援

この授業では、紙コップ花火のおもちゃの作り方を教科書で学んだあとに、自分でおもちゃの作り方の説明を書くことを目的としている。第7時の授業では、図書館司書に手作りおもちゃの本を紹介してもらったのだが、個々の特性を事前に司書に伝え、一人一人に

合った本を選んでもらった。

【学級の実態】

A・B児	文字を読んでも理解しにくい。
C児	こだわりが強く変更が難しい。
D・E・F児	選書が難しく、自分から質問することが苦手。



このような実態を踏まえて一人一人に合った本を紹介していただいた。

A・B児	絵や写真の多い本。
C児	見通しをもって活動できるように教科書に載っている書き方と同じ本。
D・E・F児	本と実物を一緒に提示し、興味をもつことができるようにした。

自分に合った本を提示してもらった児童は熱心に本を読み、意欲的に学習活動に臨むことができた。

② 1年生 図書の時間での支援

興味の幅が狭く読書の幅が広がりにくい児童には、借りる本を指定したりいろいろな本を読み聞かせたりすることによって本との出会いを大切にした。

③ 5年生 国語科 「やなせたかし」の授業での支援

自分の気に入った偉人を調べるために図書を利用した。偉人について調べるだけでなく「偉人日めくりカレンダー」を作成し友だちに伝える活動を通し、伝記を自然と紹介し合える場を作っていた。

3 おわりに

今回の実践を通して、個別に支援が必要な児童に合った本をいかに普段の生活や授業の中で取り入れるかを工夫することが大切であると感じた。文字を読むのが苦手なだけでなく、気持ちが落ち着きにくい児童も多くいる中で、図書館が学校生活の中で憩いの場として大きな存在であることが分かった。今回は国語科の授業の中での実践が多かったが、他教科でも学校図書館を活用することによって児童の興味の幅も広がると考えた。

今後も児童の思いに寄り添いながら、居心地の良い図書館空間を意識して模索を続けていく。

学校図書館を活用したインクルーシブ教育の実践

岡山市立操山中学校 教諭 酒見 紗世
学校司書 鶴身 知子

1 はじめに

本校は、全校生徒 604 名、1 年生 6 学級、2 年生 6 学級、3 年生 6 学級、特別支援学級 5 学級の中規模校である。

今回は図書館を活用し、全ての生徒が同じ環境・条件で授業に参加したり、読書をしたりすることを目標に、図書館司書、国語科を中心に分析・検討を行い、取組んだ内容を紹介する。

2 具体的な取組

(1) 図書館の取組

① 「色覚多様性」の生徒への対応

掲示物・書架の棚見出しの文字を「丸ゴシック体」に統一した。また、分類表示等の掲示物の色の組合せを、見やすい色に変更した。

② 漢字の読みが苦手な生徒への対応

特別支援学級の生徒に限らず、漢字の読みが苦手な生徒は多い。実際に、図書委員の生徒が毎回委員会のレジュメを読む際に、詰まったり他の生徒に尋ねたりする様子が見られた。そのため、館内表示・掲示物や、図書館発行の「図書館だより」「新刊案内」、図書委員会の「レジュメ」の中の小学校高学年以上で習う漢字にはルビをつけるようにした。

③ 潜在的に読書に困難を抱えている生徒への対応

12 月 3 日からの「障害者週間」に合わせて、以下の取組を行った。

・「バリアフリー図書」の展示（りんごの棚）の作成

点字図書・LLブックを購入し、購入不可の「布絵本」「大活字本」「オーディオブック」（朗読CD）、デジタル図書（DAISY）は県立図書館から借りた。館内入ってすぐのテーブルに別置コーナーを作成し、DAISY 図書は昼休みに流した。その結果、関心をも

って手に取って触れたり、友だちと感想を述べあったり、DAISY について司書に尋ねたりする生徒がいた。

中でも「点字絵本」「布絵本」に関心をもつ生徒が多くいた。

・リーディングトラッカーの作成

昼休みに、希望者を募り作成した。また、図書館用に 8 色の「リーディングトラッカー」を購入した。「図書館だより」や館内掲示で来館者にいつでも使えるよう告知した。

④ 特別支援学級の生徒への対応

図書館を利用する生徒が少ないことから、特別支援コーディネーターに生徒の様子を尋ねたところ、「本を読む習慣がない」「漢字が苦手な生徒が多い」「文字が多いものは読もうとしない」「図書館が教室から遠く、人が多いので休み時間・昼休みに行くのは嫌」という話を聞いた。そこで、読書週間期間に「期間限定出張図書館」と称して自校図書館の蔵書から希望を取り、学級文庫の本を増やす取組を行った。通常学級にも同様に行った。

(2) 教科の授業での取組

① 1 年生図書館オリエンテーション

入学して初めて図書館を訪れた生徒に向けて、図書館の利用の仕方について説明した。その際、視覚優位の生徒に分かりやすくするため、写真やイラストを使ったラミネート資料を作成した。また、色覚多様性の生徒に対応し、赤色の台紙だった「見出し」を青色に変更した。

② 3 年生理科『DNAや遺伝子の応用や研究』または『生物の進化』



第3学年には「外国にルーツがある」生徒が在籍しており、「難しい日本語が読めないの、読みやすいものを教えてほしい」と本人から要望があった。そこで、絵本でルビがある図書を紹介したところ、調べ学習を進めることができていた。

特別支援学級の生徒にも同様に実施した。

③ 1年生国語「本のPOP作り」

第1学年の生徒全員と、一部の特別支援学級を対象に、本のPOP作成の授業を行った。漫画と雑誌以外の本という条件で、各自がおすすめた本を選ばせた。その際、読書の習慣がない生徒や読書が苦手な生徒向けにブックリストを作成し、配布・別置して紹介した。ブックリストには、様々な生徒の興味・関心に合うように0～9類の本を選んだ。また、文章を読むのが苦手な生徒にも分かりやすいように、ルビがついているもの、9類以外ではイラストやマンガなどによる説明が多めのもの、9類は短編集など文章が短めのものを選んだ。読書が苦手な生徒も、ブックリストを見たり、司書や教師の助言を元にしたりにして、本を選ぶことができた。

POPには書名、作者名、出版社、出版年の他、キャッチコピーとおすすめる理由を必ず書くように指導した。本を何度も読み返しながら、本の魅力が伝わるキャッチコピーや文章を考えることで、その本をさらに読み深めることができていた。

なお、作成したPOPは図書館外廊下に掲示した。



④ 2年生国語「読書を楽しむ～本を紹介する『本の紹介合戦をしよう』～」

第2学年の生徒全員を対象に、お気に入りの本を紹介し合う「紹介合戦」を行った。漫画と雑誌以外の本という条件で、各自が紹介する本を選び、その本の魅力について説明する文章を書かせた。「紹介合戦」では、本の魅力が伝わるように聞き手を意識して話すよう指導した。「出会ったきっかけ」や「一番好きな場面」など、聞き手のときは本の魅力を引き出す質問をするよう促した。生徒は、自分

の好きな本について仲間に伝えることで、よりいっそうその本の良さを感じることができていた。また、仲間からの質問があると会話が弾み、笑顔でやり取りを行う様子が見られた。日頃は会話をもたない生徒同士が、一冊の本を通じてコミュニケーションを図ることができた。その授業では、特別支援学級の生徒が通常学級の生徒と交流することができた。

3 成果と課題

今回は「色覚多様性」「視覚優位」「読みが苦手」「外国にルーツがある」「読書が苦手」な生徒への対応を行った。これらは基本的には普段心がけている「レファレンスに誠実に応えていくこと」と変わりはないように思われる。

また、国語の授業では、本のPOP作成や、本の紹介という活動を通して、すべての生徒が共通して読書活動を行うことができた。その中で、お気に入りの一冊に出会うことができていた生徒が多くいるということを知ることができた。生徒のお気に入りの本の傾向は多岐にわたり、幅広いジャンルの本が選ばれていることもわかった。本校では、朝読書を実施しているが、その効果の大きさも知ることができた。

今後も生徒一人一人の「困り感」にできるだけ寄り添い、その時に必要な支援（本やサービス）を届けることを積み重ね、少しでも「読書のバリア」を取り除けるようにしていきたい。

大会役員

会長	玉島高等学校	校長	森田 保志	県SLA会長	
副会長	灘崎小学校	校長	野崎 尚子	県SLA副会長	小教研情報教育研究部会 学校図書館部会 会長
	光南台中学校	//	川原 悦子	県SLA副会長	中教研学校図書館部会 会長
	倉敷天城高等学校	//	藤井 省吾	県SLA副会長	高教研学校図書館部会 会長
県司書部会長	岡山朝日高等学校	司書	井上真紀子	県SLA司書部会会長	

実行委員会

委員長	津山高等学校	校長	滝澤 浩三	県SLA津山ブロック 高等学校 代表理事	高教研学校図書館部会 美作地区 代表理事
副委員長	美作中学校	校長	忠政 勇之	県SLA津山ブロック 中学校 代表理事	中教研学校図書館部会 美作地区 代表理事
	堰邑小学校	//	山本 信子	県SLA津山ブロック 小学校 代表理事	小教研情報教育研究部会 学校図書館部会 美作地区 代表理事
	江見小学校	//	岸 本 徹	県SLA津山ブロック 各支部会長	
	美咲中央小学校	//	池上 敏子	//	//
	成名小学校	//	宗森 雄子	//	//
	奥津小学校	//	影山 典子	//	//
	勝間田小学校	//	御藤 善子	//	//
委員	勝北中学校	校長	井上 学	県SLA津山ブロック 各支部副会長	
	東小学校	//	影山 哲也	//	//
	鏡野中学校	//	椋 代 孝	//	//
	柵原学園	//	新免 道明	//	//
	蒜山中学校	//	廣瀬 正明	//	//
	勝田小学校	//	春名 章範	//	//
	美作第一小学校	//	延東 省典	//	//
	奈義小学校	//	加治 裕代	//	//
	勝央北小学校	//	美若 利光	//	//
総務部	玉島高等学校	教諭	武部 和範	県SLA 事務局長	
	堰邑小学校	校長	山本 信子	県SLA津山ブロック 小学校代表理事	
	美咲中央小学校	//	池上 敏子	支部会長	
研究部	富原小学校	教諭	安東菜津美	事務局長(真庭市・真庭郡)	
	美作中学校	校長	忠政 勇之	県SLA津山ブロック 中学校代表理事	
会場部	蒜山中学校	//	廣瀬 正明	支部副会長	
	会場係	江見小学校	校長	岸 本 徹	支部会長
		勝田小学校	//	春名 章範	支部副会長
		美作第一小学校	//	延東 省典	支部副会長
		江見小学校	教頭	曾和 三義	事務局長(美作市)
	受付係	成名小学校	校長	宗森 雄子	支部会長
		勝北中学校	//	井上 学	支部副会長
		東小学校	//	影山 哲也	支部副会長
		鶴山小学校	教諭	安藤 優佳	事務局長(津山市)
	接待係	奥津小学校	校長	影山 典子	支部会長
		鏡野中学校	//	椋 代 孝	支部副会長
		柵原学園	//	新免 道明	支部副会長
		奥津小学校	教諭	日下 直子	事務局長(苫田郡)
		久米南中学校	教諭	杉山 知子	事務局長(久米郡)
	駐車場係	勝間田小学校	校長	御藤 善子	支部会長
		勝央北小学校	//	美若 利光	支部副会長
		奈義小学校	//	加治 裕代	支部副会長
		勝間田小学校	教頭	坂本佳世子	事務局長(勝田郡)

県SLA事務局

県事務局	灘崎小学校	教諭	藤田 雪絵	小教研 事務局長
	興除小学校	//	黒石 浩史	小教研 事務局長
	西大寺中学校	//	佐藤 恵作	中教研 事務局長
	瀬戸中学校	//	検 崎 亮	中教研 事務局次長
	倉敷天城高等学校	//	坂井 昌子	高教研 事務局長
	玉島高等学校	//	武部 和範	県SLA 事務局長
	玉島高等学校	//	室山 慶太	県SLA 事務局員
	玉島高等学校	司書	近藤佐和子	県SLA 事務局員